

二〇一八年刊の歌集 佐佐木頼綱

二〇一八年の歌集歌書を振り返る特集が総合誌に開始された。「短歌研究」座談会で言われている様に良い歌集が多かったのではないかと思う。そして賞の選考会の時期となり編集者としての準備作業に追われている。私の付箋が多かついた歌集を紹介したい。

・日高堯子歌集『空目の秋』二〇一四年～二〇一八年の四年間の四七〇首を収録している。母の介護の為に自宅と実家を行き来する生活の中での母の死や自身の暮らしを描いている。調べの良い歌柄でありつつ死生観や、人間社会と自然の境界線のような部分に着地する歌が多い。

- ・日だまりはしろい座布団ねむりつつ母とながされゆく春の川
- ・床に落ちた母を起こせず起こせぬまま並んで聞きぬ夕ほととぎす
- ・「死んだ人はまさしくことばになるのだ」と日傘たたんでひるがほに告ぐ
- ・小さな墓地購ひたりし後子のあらぬ夫婦の時間濃くなるごとし
- ・種のためにつかはざりしわが肉体茅花の原に照りかへさるる
- ・読んでいて切なくなったり、視線の鋭さにドキッとさせられた。
- ・「わたしはいいつ死ぬのかしら」ときく母に「あしたよ」といふあしたは光

ボケが始まり、現実と虚ろが混じり合う母の「あした」を見事に

描いた一首ではないだろうか。タイトルの「空目」は福岡伸一氏の言葉だそうで、「ランダムなことがらに対して特別なパターンや関係性を見てしまう脳の癖」とあとがきにある。タイトルも良いと思った。

・小林幸子歌集『六本辻』は二〇一二年～二〇一七年の作品五三四首を取めた第八歌集。様々な場所を旅し、先方で歴史や社会に思いを伸ばしている。

- ・ガス室のうすくらがりに膝をつくルドルス・ヘスの孫に生まれて
- ・この庭に公開処刑されたりし祖父のかはりにひざまづくひとルドルス・ヘスはナチスの親衛隊大将。戦争を知らない世代の苦悩や憎しみが始まっている夜会や現在を積極的に取り上げる。
- ・おとうとの死は伝へられ嘘のやうに明るいゆきがまた降りてをり
- ・おとうとが十二時間ほど生きてゐたさびしい羊の年を忘れじ
- ・一杯だけビールを飲まうおとうとよ だれも死者とは知らない町で

・六本辻のラウンドアバウト幾回りしてゐるうちに人は消ゆるも元日に亡くなられた弟への挽歌。後半二首は弟がむかし留学したエンスケデを訪れ、弟を偲んでいる。私は作品に込められた熱量が大きい歌が好きで挽歌にばかり目が行ってしまうのだけれど〈ストローに檸檬の種の詰まりたる瞬間のしーんとした感じ〉×〈パンケーキふつくら焼けてアカシアの蜂蜜の蓋まだ開けられず〉など軽やかな歌、華やかな歌もこの作者の特徴の一つだろう。